

オッカム「大論理学」の研究

渋谷克美著

オッカム『大論理学』の研究

渋谷克美 著



創文社

渋谷 克美 (しぶや・かつみ)

1948年生まれ、金沢大学大学院文学研究科修士課程修了、1991～92年 UCLA (カルフォルニア大学ロスアンジェルス校) 客員研究員、現在愛知教育大学教授。
〔訳書・論文〕トマス・アキナス『神学大全』第22分冊 (創文社、1991)、『オッカムの概念論——フィクトゥム説からインテレクチオ説への変換』(日本哲学会『哲学』41号、1991)、『スコトッスの個体化の理論に対するオッカムの批判』(中世哲学会『中世思想研究』35号、1993)、『オッカムにおける、自己の認識活動へと立ち返る直知認識』(関西哲学会『アルケー』3号、1995) 他。

〔オッカム『大論理学』の研究〕

ISBN4 423-17100-7

1997年2月25日 第1刷印刷

1997年2月28日 第1刷発行

著 者 渋谷 克美

発行者 久保井 浩俊

発行所 〒102 東京都千代田区麹町 2-6-7 株式会社 創文社
電話 (3263) 7101 振替 00120-0 92472

Printed in Japan

暁印刷・鈴木製本

緒 論

先ずはじめに、オッカム研究の意義、本書において私の採用したオッカム研究の方法、および本書の大まかな内容について述べたいと思う。これらのことを前もって知っていただくことは、私の本の読者諸氏にとって有益であると考えからである。

(1) オッカム研究の意義

ウィリアム・オッカム (Guillelmus de Ockham, ca. 1285—1349) は、中世における卓越した論理学者であり哲学者である。彼の論理学、とりわけ代示 (suppositio) の理論は、14世紀以降の中世後期の論理学や哲学に大きな影響を及ぼし、いわゆるオッカム派と呼ばれる思想グループを形成していく。このようなオッカムの哲学について研究することは、次の二つの点で大きな意義を有する。一つは、オッカムは中世から近世への思想の転換点に位置し、それゆえ、オッカムの哲学を研究することによって、13世紀のトマス・アクィナス (ca. 1224—1274)、ドゥンス・スコトゥス (ca. 1265—1309) から、14世紀のオッカムへと続く哲学史の流れが明確になることである。従来の哲学史研究においては、13世紀後半から14世紀前半にかけての精密な研究が全く欠如しており、オッカムについての研究は、この研究の欠如を補う意義を持つ。

いま一つには、オッカム達の中世論理学のテキストを読むと、我々はその内に、現代の論理学や言語哲学の議論ときわめて類似したアイデアを見出すことができるのであり、従って、オッカムの哲学は、現代の論理学や言語哲学で論じられている問題を解明するのにも役立つと考えられることである。実際、オッカムが、彼と同時代のバーレー (Walter Burleigh) やチャトンのグアルテルス (Gualterus de Chatton)、あるいは偽カムプザルのリカルドゥス (Pseudo Richardus de Campsall) と行なっている議論は、きわめて新しい視点を、我々に提供してくれているように思われる。筆者がこの二十数年の間、オッカムの研究に取り組んできたのは、こうした理由からである。

(2) 私の用いたオッカム研究の方法

本書は、このような私の研究のうちで、ウィリアム・オッカムの主著である『大論理学』(Summa Logicae)の第1部のテキストの精密な分析・検討を通じて、彼の論理学、とりわけ代示(suppositio)の理論を解明しようとしたものである。オッカムの『大論理学』は、アリストテレスのオルガノン(すなわち、範疇論、命題論、分析論、トピカ、詭弁論駁論)全体を含むものであるが、中世論理学の歴史は次の三つに区分される。第一は8世紀末から12世紀までの“Logica vetus”(古い論理学)の時代である。この時代には、アリストテレスの『範疇論』、『命題論』についてポエティウス註解、ポルフィリオスの『イサゴゲー』のみが研究されていた。第二は、12世紀の終わりにアラビアからアリストテレスの哲学が逆輸入され、分析論や詭弁論駁論をも含めてアリストテレスの論理学全体が研究されるようになる。“Logica nova”(新しい論理学)の時代である。第三が、アリストテレスの誤謬推論の研究からでてきて、アリストテレスにはなかった中世論理学独自の分野が発展するようになる“Logica moderna”(現代論理学)の時代である。この中世論理学独自の分野が、〈語が、それが実際に使われる命題のコンテキストの中で何を指示しているのか〉を研究する代示(suppositio)の理論である。この理論は、14世紀のオッカムの代示の理論を最高の頂点とし、その後ルネサンスの時代に消滅してしまうものであるが、しかし前述したごとく、我々はその内に現代の論理学や言語哲学の議論ときわめて類似したアイデアを見出すことができるのである。

こうしたオッカムの『大論理学』を研究する際に筆者は、(1)オッカムの言わんとする事を、あくまでもオッカムのテキストに即して明らかにすること、(2)更にそれだけでなく、オッカムの理論を、オッカムが彼の周囲の人達と行なった議論のコンテキストにおいて理解することをめざした。或る哲学者の思想を、彼と同時代の、しかも彼の周囲にいた人々が実際に行っていた議論との関連において解釈することは、哲学史研究の最も基本的な態度であると考えたからである。それゆえ筆者は、オッカムのテキストだけでなく、オッカムと同時代のバーレーやチャトンのグアルテルス、あるいは偽カムブリザルのリカルドゥス達のテキストをも綿密に検討した上で、オッカムの理論を解釈しようと努めた。このことが、私の研究方法の最大の特徴である。

それゆえ、私は本書の付録として、オッカムのテキストを翻訳し、それに極めて詳細な註を付けた（関連テキストの翻訳と註解）。オッカムの著作の日本語訳が未だ存在せず、オッカムの思想が二、三の概説書か研究書によって以外には、全く知られていない日本の現状を考えると、このような基礎作業はぜひとも必要なものと思われたからである。ただし、そこでの膨大な訳者註解を見ていただくと、すぐわかるように、この関連テキストの翻訳と註解は、本文での研究の単なる付録ではない。筆者は訳者註解において、オッカムの説に関してオッカムが同時代の人々（パーレー、チャトンのグアルテルス、あるいは偽カムプザルのリカルドゥス）との間で行なった論争、これまでのオッカム研究においてなされてきた諸々の議論を挙げ、解明されるべき幾つかの問題を指摘した。これら関連テキストの訳者註解で指摘された問題を取り上げ、それらについて詳細に論じたのが、本文での私の研究である。それゆえ、関連テキストの翻訳と註解は、本文と密接に関連しており、それは、本文での私の研究の前提となっている。

（3）本書の内容

本文では先ず第1章（「オッカムの概念論——フィクトゥム説からインテレクトオ説への変換——」）において、「心の外に、普遍的な共通本性（*natura communis*）の存在を認めず、外界における事物はすべて個物であって、普遍であるのは人為的に制定された言語、あるいはより本来的には、我々の心を持つ言葉・概念のみである。概念は、ちょうど音声語や文字語が外界の事物を表示し代示するのと同じように、外界の多くの事物を表示し代示する、事物の記号（*signum rei*）であり、それゆえ普遍という性格を有する」と主張するオッカムの代示の理論の基本的なテーゼを取り上げた。すなわち、上述のテーゼは、オッカムの理論において一貫して変わっていないのであるが、しかし〈この事物の記号である概念が、如何なるものとして心の中に在るのか〉、〈概念は如何なる存在を持つのか〉という問題に関しては、オッカムは自らの考えを変更している。オッカムが『大論理学』第1部第12章で論じている、概念をフィクトゥムであるとする説から、インテレクトオであるとする説への変換が、それである。『センテチア註解』の第一版を書いたころの、前期のオッカムは、フィクトゥム説を考えていた。フィクトゥム説によれば、概念とは知性認識の活動の結果として、我々の心の中につくられ

た心象 (fictum) であり、それゆえ、認識活動とは別な、それとは独立した何かである。例えば、私が目の前の事物を認識して、心の中に思い描くイメージ、心の中につくられた心象・観念像 (フィクトゥム) が、概念なのである。このフィクトゥムが、目の前の事物に対応し、それを表示する。この私の持つイメージは、私の心の中にのみ観念的に存在するもの (ens rationis) である。勿論それは、心の外の実在的な事物 (ens reale)、例えば机が在る、本が在るというのとは異なる仕方においてはあがあるが、しかし在ることに間違いない。すなわち、フィクトゥムは、心の外の事物が持つ実在的存在 (esse subiectivum)、つまりアリストテレスの十個の範疇に区分される有とは別な存在方式を心の中に有するものなのである。フィクトゥムは、認識されたもの (esse cognitum) として、認識の対象 (esse obiectivum) として心の中に在る。しかし、後期のオッカムは、「実在的存在以外には、何も存在しない」と主張して、フィクトゥム説を棄て、逆に、前期において否定されたはずのインテレクチオ説へと向かう。すなわち後期のオッカムによれば、概念とは、知性認識の活動の結果生じ、心を基体としてそのうちに実在的に存在する (esse subiective in anima)、心の性質である。それは十個の範疇の一つに属するものであり、ちょうど壁の白、火の熱さが実在的な存在を持つのと全く同じ仕方、実在的な存在を持つ (qualitas 説)、あるいは、知性認識の活動 (actus intelligendi) そのものが概念である (インテレクチオ説)。筆者は、このオッカムのフィクトゥム説からインテレクチオ説への変換に関して、次の五つの問題

- ① 後期のオッカムはフィクトゥムを全面的に否定したのか
- ② 何故オッカムはフィクトゥム説からインテレクチオ説へと、自己の考えを変換したのか
- ③ インテレクチオ説は、何か哲学的に新しい視点を我々に与えてくれるのか
- ④ インテレクチオ説のみで、我々の認識全体を十分に説明できるか
- ⑤ もし我々がインテレクチオ説を採用するとしたら、我々は、先に提出されたインテレクチオ説を反駁する議論に対して如何に反論したらよいのか

を考察した。

次に筆者は第2章 (「スコトゥスの個体化の理論に対するオッカムの批判」)

において、多くの事物の内に共通に内在する普遍的な原理——共通本性（*natura communis*）——を心の外に措定するスコトゥスの個体化の理論に対する、オッカムの批判を取り上げた。先ず第2章の第1節から3節において、オッカムが『大論理学』第1部第16章、『センテンチア註解』第1巻第2区分第6問題で行なっている、スコトゥスの個体化の理論に対するオッカムの三つの批判を検討し、オッカムの批判がスコトゥスの側から反論可能なものであり、それゆえ、彼の批判は必ずしも正当とは言えないことを指摘した。しかしだからと言って、オッカムの批判が全く的是はずれであり、無価値なものと思ふべきではない。むしろ、スコトゥスに対するオッカムの批判は、両者の存在論の根本的相違に基づくものとして理解されるべきなのである。スコトゥスに対するオッカムの批判の意図が、「多くの個物の内に内在している普遍的原理——共通本性——が心の外に存在する」というスコトゥスの主張の否定にあったことは明らかである。スコトゥスによれば、我々の世界を根拠づけるものとして、普遍的原理・共通本性が外界に先ず存在し、その一なる普遍的原理・共通本性が、個体化の原理により多くの事物へと個別化されることによって、個物が存在する。すなわち、スコトゥスは、「個物は、普遍的原理・共通本性によって根拠づけられており、普遍的原理に基づいて存在する」と考えている。他方オッカムは、このようなスコトゥスの唱える〈多くの個物の内に内在する普遍的原理——共通本性——〉の存在そのものを否定する。従って、オッカムにとっては、共通本性というものが存在しないのであるから、「如何にして普遍的な共通本性が個別化されるのか」というスコトゥスの個体化の問題は誤って立てられた問題なのであり、それゆえ、スコトゥスによって共通本性と個体的差異・このもの性とに間に措定された形相的区別（*distictio formalis*）も不要となる。かくして、普遍よりも個物を優位に置く存在論が徹底され、普遍的原理である共通本性が否定されることによって、「外界の事物すべて、個である」というオッカムの個体主義が成立する。

更に筆者は第3章（「代示 *suppositio* の理論の歴史的発展過程におけるオッカムの位置」）において、オッカムが『大論理学』第1部第63～77章で論じている代示の理論を、他の代示の理論（12世紀に書かれた初期の代示の理論、13世紀のシャーウッドの代示の理論、オッカムと同時代のパーレーの理論等）と比較した。そこにおいて明らかになったことは、オッカムの代示の理論が、

代示の理論の歴史的発展過程の中できわめて特異の位置を占めているということである。オッカムは彼以前の代示の理論を改革し、新しい代示の理論を構築したのである。これまでの代示の理論の研究者は、「代示 (suppositio) とは、言葉が、それが使われている命題のなかで、それが実際に話されるコンテクストにおいて、或るものを指示する働きであり、この点で suppositio は、言葉が単独で或るものを指示する表示 (significatio) の働きと区別される」と説明している。従来の研究者達 (例えば, Ernest A. Moody, L. M. De Rijk, Alexander Broadie) は、これが代示 (suppositio) の持つ本質的な特性であると見做してきた。しかし私の意見では、これは、オッカムの理論を彼以前の人々の理論の集大成と考え、オッカムの理論をモデルにして代示 (suppositio) の理論全体を理解しようとしている点で、正しくない。確かに、オッカムの代示の理論においては、代示 (suppositio) はこのような特性を持つ。然し、本書で詳細に述べているごとく、代示 (suppositio) がこのような特性を持つのは、オッカムの改革によるのであって、suppositio の理論が最初から、本質的に、このような特性を持っていたわけではない。もともと初期の suppositio 理論は、全く別のアイデアに基づいて成立したものであり、オッカムの改革によってはじめて、代示の理論は純粋に言語の、あるいは概念の指示機能を研究する理論となったのである。更に筆者は第3章第4節において、このオッカムの代示の理論の改革が、第2章で論じられたオッカムの個体主義と密接に結びついていることを指摘した。

最後に筆者は第4章(「オッカムの個体代示 *suppositio personalis* についての解釈」)において、オッカムが『大論理学』第1部69~74章の中で論じている個体代示に関して最近提出された二つの相反する解釈を検討した。先ず、Priest と Read の解釈を取り上げた。この解釈は、Ph. Boehner, Kneale, Loux, Spade 達によっても広く一般的に採用されてきた解釈であり、この解釈の特徴は、「オッカムが三種類の個体代示を下降という論理操作によって定義した際に、オッカムは元の命題と、下降によって形成された全命題群とが等値であると考えていた」と解する点にある。Priest と Read, Spade は更に、このような解釈に基づいて、オッカム自身が特称否定命題の述語の代示に関して或る誤りを犯していると主張する。すなわちオッカムは『大論理学』第1部第74章の中で、特称否定命題、例えば「或る人間は白くない」

の述語「白い」が周延的不特定個体代示 (suppositio confusa et distributiva) を持つと述べているが、これは次の理由から誤りである。もしオッカムの言うように、「白い」が周延的不特定代示を持つならば、「或る人間は白くない」という命題と、下降によって形成された「或る人間はこの白いものではない、且つ或る人間はあの白いものではない、且つ……」という連言の命題の命題群とが等値であり、相互に含意可能なはずである。しかし

$$\begin{aligned} (\text{或る人間は}\underline{\text{白くない}}) \longrightarrow \{ & (\text{或る人間は、}\underline{\text{この白いもの}}\text{ではない}) \wedge \\ & (\text{或る人間は、}\underline{\text{あの白いもの}}\text{ではない}) \wedge \dots \} \end{aligned}$$

という推理は成立するが、逆の推理

$$\{ (\text{或る人間は、}\underline{\text{この白いもの}}\text{ではない}) \wedge (\text{或る人間は、}\underline{\text{あの白いもの}}\text{ではない}) \wedge \dots \} \longrightarrow (\text{或る人間は}\underline{\text{白くない}})$$

は成立しない。それゆえ、特称否定命題の述語が周延的不特定個体代示を持つとオッカムが述べているのは、誤りである。

こうした、特称否定命題の述語が周延的不特定代示を持つことに伴う難点の解決案として提出されたのが、Corcoran や Swiniarski 達の解釈である。彼等は、「オッカムが個体代示を下降という論理操作によって定義した際に、オッカムは元の命題と下降によって形成された全命題群とが等値であると考えた」とする Priest と Read 等の解釈を否定する。すなわち、例えば「白い」という名辞が周延的不特定個体代示を持つのは、その名辞の概念のうちに含まれる個々のものへと、連言命題を用いて下降することができる場合であるとオッカムが述べた(『大論理学』第1部第70章)時に、彼が条件として挙げているのは、Priest と Read, Loux 達の解釈のように、元の命題と下降によって形成された諸命題の連言とが等値であり、相互に含意可能であるような下降 $(\text{或る人間は}\underline{\text{白くない}}) \longleftrightarrow \{ (\text{或る人間は、}\underline{\text{この白いもの}}\text{ではない}) \wedge (\text{或る人間は、}\underline{\text{あの白いもの}}\text{ではない}) \wedge \dots \}$ が成立することではない。「白い」という名辞が周延的不特定代示を持つためには、単に、 $(\text{或る人間は}\underline{\text{白くない}}) \longrightarrow \{ (\text{或る人間は、}\underline{\text{この白いもの}}\text{ではない}) \wedge (\text{或る人間は、}\underline{\text{あの白いもの}}\text{ではない}) \wedge \dots \}$ という下降が成立することだけで充分であって、必ずしも元の命題と下降によって形成された諸命題の連言とが等値であり、相互に含意可能である必要はない。この Corcoran と Swiniarski の解釈を採用するならば、特称否定命題の述語が周延的不特定代示を持つとするオッカムの説は誤っていないことになる。

筆者は第4章において、この Corcoran と Swiniarski の解釈を強力に支持する議論を展開した。先ず第一に、Priest と Read 達の解釈がただ単にオッカムのテキストの一節と矛盾するだけでなく、中世論理学において広く一般的に正しいと認められていた mobility-rule やその他の多くの論理規則とも矛盾することを明らかにすることによって、もし我々が、Priest や Read 達の解釈を採用するならば、我々は中世論理学全体を大幅に変更しなければならなくなることを指摘した（第1節）。第二に、Priest や Read が行なっている自己の解釈の弁護が正当ではないことを明らかにした（第2, 3節）。

目 次

緒 論	v
-----------	---

第1章 オッカムの概念論——フィクトゥム説からインテレクチオ説への変換

序 オッカムの概念論の基本的なテーゼ	3
1 第一問題 後期のオッカムはフィクトゥムを全面的に否定したのか	11
2 第二問題 なぜオッカムはフィクトゥム説からインテレクチオ説へと 考えを変換したのか	15
3 第三問題 インテレクチオ説は、何か哲学的に新しい視点を与えて くれるのか	33
4 第四問題 インテレクチオ理論のみで、我々の認識全体を十分に 説明できるか	37
5 第五問題 インテレクチオ説を反駁する有力な議論に対する私の反論	42

第2章 スコトゥスの個体化の理論に対するオッカムの批判

序 スコトゥスの個体化の理論	49
1 オッカムの批判（Ⅰ） 形相的区別に対するオッカムの批判	55
2 オッカムの批判（Ⅱ） スコトゥスの個体化の理論の内部の矛盾	63
3 オッカムの批判（Ⅲ） スコトゥスの理論は哲学の基本的ルールに反する	75
4 「スコトゥスの存在論」対「オッカムの存在論」.....	83
5 コペルニクスの転回 多くの個物に内在する共通本性の否定	111

第3章 代示の理論の歴史的発展過程におけるオッカムの位置

1 はじめに	119
2 オッカム以前の代示の理論	122
3 オッカムの改革	129
4 オッカムの改革の理由	148
補遺 倉持氏の質問に答えて	150

第4章 オッカムの個体代示についての解釈

序	オッカムの個体代示の理論に対する相反する解釈	173
1	ブリーストとリード達の解釈と、コルコランとスウィニアルスキー達の解釈のどちらが適切であるか	188
2	ブリーストとリードの自己弁護は正当であるか(I)	194
3	ブリーストとリードの自己弁護は正当であるか(II)	203
補遺	特称否定命題の述語が、周延的不特定代示を持つことに伴う 難点の解決に関する清水氏の提案	215

関連テキスト：翻訳と註解

第1章	語の定義とその区分(総論)	231
第11章	人為的約束によって制定されて、表示の働きをする名辞の区分。 すなわち、第一命名の名辞と第二命名の名辞の区分	233
第12章	第一概念とは何であるか、第二概念とは何であるか、両者は 如何なる仕方で互いに区別されるのか	236
第16章	普遍の存在に関する見解について、普遍は如何なる仕方で 心の外に存在を有するのか、スコトゥスに対する反駁	238
第17章	これまで述べられた事に対して向けられうる諸々の疑問の解決	242
第63章	命題における語の代示について	247
第64章	代示の区分	249
第66章	これまで述べられた事柄に対してなされうる反論について	252
第70章	個体代示の区分	258
第71章	普通名辞はどんな場合に或る個体代示を持ち、どんな場合に 別の個体代示を持つのかを知るための規則	261
第73章	一括的不特定代示とそれに関する諸規則	263
第74章	周延的不特定代示とそれに関する諸規則	266
訳者註解		269
あとがき		353
参考文献		355
索引		361

オッカム『大論理学』の研究

第1章

オッカムの概念論^{*)}

——フィクトウム説からインテレクチオ説への変換——

序 オッカムの概念論の基本的なテーゼ

「外界における事物はすべて個物であって、普遍であるのは人為的に制定された言語、更により本来的には、我々の心がもつ言葉・概念のみである。概念は、外界の多くの事物を表示 (significare) し、代示 (supponere) する記号であり、それゆえ、普遍という性格を持つ」というのが、『大論理学』(*Summa Logicae*) におけるオッカムの基本的な立場である。このオッカムの概念論は次の特徴を持つ。オッカムは、第1部第12章で「概念とは何か」という問いをたてて¹⁾、この問題について議論しているのであるが、彼が一貫して主張するのは、「概念は、我々が話したり書いたりする言語と類似した、心の内の言葉 (verbum mentale)²⁾ である。音声語や文字語が外界の事物を

*) オッカムのテキスト Guillelmi de Ockham Opera Philosophica et Theologica, St. Bonaventure, N. Y. 1967~のうち Opera Philosophica を OPh, Opera Theologica を OTh と略記。

本章の関連テキスト(第1部)

第1章 語 (terminus) の定義とその区分 (総論)。

第11章 人為的約束によって制定されて、表示の働きをする名辞の区分。すなわち、第一命名の名辞 (nomen primae impositionis) と第二命名の名辞 (nomen secundae impositionis) の区分。

第12章 第一概念 (intentio prima) とは何であるか、第二概念 (intentio secunda) とは何であるか、両者は如何なる仕方で互いに区別されるのか。

1) OPh I, p. 42.

2) 『大論理学』第1部第1章；OPh I, p. 7, lin. 22.

表示し、代示するのと同じように、概念は外界の事物を表示し、心の中に懐抱され、形成される命題の主語や述語として、或るものを代示する記号である」という論理的テーゼである。ここにおいてオッカムは、「概念とは何か」という認識論の問題を、表示の理論や代示の理論といった論理学の問題へと還元している¹⁾。我々が外界の事物Aを認識し、それについて考えている時、我々の持つ概念は、事物Aを表示している。この意味で、オッカムは概念を「事物の記号」(signum rei)と定義している。

以上述べた基本的なテーゼは、オッカムの概念論において、一貫して変わっていない。しかし、ペーナー²⁾が指摘しているごとく、「この概念が、如何なるものとして心の中に在るのか」、「概念は如何なる存在を持つのか」という問題に関しては、オッカムは自らの考えを変更している。フィクトゥム説からインテレクトォ説への変換が、すなわちそれである。『大論理学』第1部第12章の箇所³⁾では、〈観念・概念とはなにか〉という問題について、オッカムは fictum 説, qualitas 説, intellectio 説の三つを挙げ、最後のインテレクトォ説を支持している。更にオッカムは『センテンチア註解』第1巻第2区分第8問題 (OThII, pp. 266-292), 『アリストテレス命題論註解』第1巻序章§3-10 (OPhII, pp. 348-371), 『七巻本自由討論集』第4巻第35問題第2項 (OThIX, pp. 472-474), 『アリストテレス自然学問題集』第1問題〜第7問題 (OPh VI, pp. 397-412, 渋谷克美訳『季刊哲学』11, 哲学書房, 1990年, 102~125頁)においても、この問題について実にさまざまな説を提出して議論している。

〈前期〉

- ①「概念はフィクトゥムである」という立場(フィクトゥム説)からの、オッカムの記述

Et propter istam rationem [fictum] magis potest supponere pro re et

1) オッカムは彼独自の認識理論として、直知認識(cognitio intuitiva)の理論を持っている。しかし、直知認識の理論においても、このオッカムのテーゼは変わらない。

2) Ph. Boehner, "The Realistic Conceptualism of William Ockham," *Traditio*, IV, 1946, pp. 307-335. この論文は"Collected Articles on Ockham," Franciscan Institute, 1958, pp. 156-174 に所収されている。

3) OPhI, p. 42, lin. 29 p. 43, lin. 39. 関連テキスト237頁及び註解23(277頁)を参照。